



令和5年8月21日(月) No.6 文責:校長 梅津 禎司

◎ 夏休みもあと10日間!

長かった夏休みもあと10日で終了です。2学期への準備は万全でしょうか。この夏休みは、台風の接近や豪雨などがあり、8月9日の平和集会も延期となりました。また、毎日が猛暑の連続で、大変な夏休みでした。

さて、いよいよ2学期が9月1日から始まります。“実りの秋”の2学期です。中学生としての大いなる実りが収穫できるよう、今のうちから2学期に備えておいてください。特に、夏休みの課題等は早めに終わらせ、心身共に2学期に備えた心構えをしておいてください。

◎ 平和集会で皆さんに話したかったこと!

台風の接近で延期になっていた平和集会を、明日22日の3校時めに、実施内容を変更し、平和学習の発表会形式で実施します。せっかく皆さんが準備してくれたものを発表してください。

なお、校長講話は実施せず、皆さんに話したかったことをこの後に記載します。しっかりと読んで、私が何を訴えたかったのかを各自で読み取ってほしいと願っています。

8月9日県民祈りの日 一平和集会校長講話一

今日は、長崎に原爆が投下されてから78年目にあたります。

長崎県では、今日8月9日を、広島では8月6日を「県民祈りの日」として、各学校は、登校日としています。みなさんも小学生の頃から、この祈りの日には平和集会に参加し、もう何年も平和や原爆について学習し、考えてきていることと思います。

さて、私は、時々長崎に行きます。現在の長崎の街は、新しい県庁舎ができたり、西九州新幹線開業に伴う駅前再開発が進んでおり、78年前に原爆が投下された同じ場所とは思えないほど、たくさんの人や車が行き交い、キラキラ輝いています。このような光景の中、太陽がじりじりと照りつけ、蝉の声が響き渡る夏の日、あの日もこんな暑い日だったのです。長崎や広島の人々は、あのようなことが起こるとは誰も想像だにせず、その日もいつもと変わらない日常を送っていました。

私の伯父は5年前に亡くなりましたが、被爆者でした。しかも、爆心地の直ぐそばの三菱兵器製作所で少年工兵として働いていました。その日もいつもと同じように早朝から旋盤機の修理をしていました。その日も夏の猛暑が続いており、汗まみれになりながら作業をしていました。汗で手が滑り工具が大きな機械の下に転げ落ちました。伯父は、工具を拾おうと機械の下にもぐったその時、すぐ近くで原爆がさく裂したのです。機械の下の潜っていたため伯父は無事だったそうです。しかし、工場の大きな鉄骨の柱はあめ細工のように曲がり、工場の天井や壁も吹っ飛んでいたため、夏の青空が見えていたそうです。

と、こんな話を昨年したのですが、2年生や3年生は覚えているでしょうか。伯父の原爆体験の話は今年はこのくらいにしておきますが、伯父は、何人もの生存者を道ノ尾の野戦病院まで運び、数日後国見の家にかえりました。家に帰ったとたん、発熱し一週間ほど意識不明の状態だったそうです。意識不明になった原因は、疲れもあるとは思いますが、背中に負った傷のせいでした。幅2センチ、長さは10センチほどの傷だったそうですが、機械の隙間から入った閃光を浴びていたのです。その傷が化膿し、それが原因で意識不明になっていたそうです。しかし、奇跡

的に回復した叔父は、93歳まで生き、私に毎年原爆の体験談を話してくれました。

子どものころ毎年のように聞いていた戦争の話はこれだけでなく、他に2人の伯父がいます。一人は、特攻隊員で、もう一人はシベリア抑留兵です。

特攻隊員の伯父は、若くして病気で亡くなりましたが、伯母が良く話をしてくれました。その伯父は、海軍にいましたので、皆さんにおなじみの指宿ではなく（指宿は陸軍）、鹿屋海軍飛行隊に所属していました。昭和20年8月15日正午出撃が決まり、出撃準備に取り掛かっていたそうです。その日は恒例になっている出撃時にする所作を終え、飛行機に乗り込み、上官の合図を待っていたそうです。しかし、出撃の命令は下りませんでした。なぜなら、その日の正午から天皇による玉音放送があったからです。上官たちが機上している叔父たちに飛行機を降りよう命令したそうですが、1番機の隊長と2番機の副隊長は制止を振り切って出撃したそうです。伯父も飛行機を降りようとしていたそうですが隊長たちが出ていこうとしているのを見て自分も行く決め、再度乗り込もうとしたそうですが、周りの人たちに止められたそうです。死ぬまで自分も隊長たちと一緒に来たかったという失意の中で若くして病気で亡くなりました。もし、伯父が特攻隊員に選ばれなかったなら彼にはもっと違う生き方ができたのかもしれない。

また、シベリアに抑留された伯父は、シベリアでの強制労働についてよく話をしてくれました。冬のシベリアはマイナス30度近くになる極寒の地です。そんな中で、毎日早朝から日が暮れるまで働かされたそうで、出される食べ物といえば、薄いパン1枚と冷たいスープを少しだけの食事がだされるだけでした。また、夜にはマイナス30度以下になり、極寒の中で毛布1枚で寒さに震えながら過ごしていたとっていました。少し汚い話ですが、シベリアでは便をするとすぐに凍ってしまい、特に大の方はすぐに水分が奪われるので乾燥し、薪の代わりとして燃やして暖をみんなとっていたそうです。マイナス30度以下になると仕事をしなくてもいいのだそうですが、マイナス30度以下になっても労働しなければならなかった日もあったようです。体力がない人や病気がちの人はどんどん亡くなっていき、明日は我が身だと思いながら日々を暮らしていたそうです。終戦から数年後に日本に帰ることができた時にはうれしくてたまらなかったとよく言っていました。

戦争は、こんなに悲惨な状況を否応なく経験させ、そして今でも原爆の後遺症に悩まされたり、戦争の傷に苦しんでいる人が大勢おられます。長崎や広島には、この過ちを二度と繰り返してはならないという被爆者の方々の強い願いがあるというのに、世界には今もなお、地球を何個も破壊するだけの核兵器があるのです。核を保有している国は9カ国、実践に使用可能な数はいまだに増え続けているといます。

78年の年月を経て、被爆された方の平均年齢は85歳近くになり、被爆体験を語り継ぐ人が少なくなってきました。そんな時だからこそ私たちにもできることがあると思います。平和を希求する運動は小さなことからでも、私たちが本気で考え行動するならば、それは大きな力になっていくのです。

長崎にある平和祈念像を思い出してください。南島原市出身の北村西望さんが創られました。天を指す右手は「原爆の脅威（長崎の過去）」を、水平に伸ばした左手は「平和（長崎の未来）」を示し、軽く閉じた瞼は戦争犠牲者の冥福を祈っているそうです。



今日の平和集会の最後にある黙祷では、原爆で亡くなられた方に心から哀悼の意を捧げましょう。そして、世界で2つしかない被爆県長崎の県民として、今日の1日を平和のためにできることは何かをみんなで考える日にしてほしいと思います。